

◇特集 北米文学における核の表象について

日系カナダ人作家ジョイ・コガワ『オバサン』における「原爆」

松尾 直美

一. はじめに

ジョイ・コガワの『オバサン』（一九八一年）は、コガワの自伝的要素を含ませながら、第二次世界大戦中のカナダにおける日系カナダ人の強制収容・移住を主に描いている。日系三世のナオミ・ナカネの視点を中心に展開していく作中において、戦争や強制収容の記憶は、主人公ナオミにとつて「最も語りたくないこと」（四〇）⁽³⁾であり、「過去の痛み」（五四）や癒えぬ「古傷」（二三七）を伴うことが強調されている。それ故に、ナオミの強制収容体験の記憶そのものが、その当時の幼さも相まって、「水中の魚影のように灰色で、はかない」（二五）と例えられているように、断片化された曖昧なものになっている。しかし、『オバサン』において強制収容の物語は、ナオミの物語だけで語られるわけではない。原題である「オバサン」たちの物語が、つまり、政治運動家のエミリー叔母さん、不在の両親に代わってナオミを育てたアヤ伯母さん、そして日本に一時帰国したまま行方不明となったナオミの

母親など女性たちのそれぞれの物語が、日記、写真、手紙によって抽出され、紡ぎ合うことでポリフォニック、多声的な物語として完成する。『オバサン』における戦争や強制収容は、そのような女性たちの声や姿など様々な方向から描かれ、それをたどると日系カナダ人の周縁性や人種差別などの強制収容に至った根源的な諸問題などに至る。さらに、冒頭から作品全体を覆うある謎の結末として原爆が用いられる。この原爆というテーマが、主人公が長年抱いていた謎を解き明かす鍵となることで、作品自体が「戦争とは何か」という大きな問題をナオミや読者に問いかけていくことになり、単なる自伝的な強制収容物語に終わらないこととなる。

本稿では、強制収容をテーマにした作品の中に現れる「原爆」について、考察していきたい。

二. 『オバサン』における「原爆」の位置づけ

『オバサン』は主人公ナオミとナオミの伯父であるイサムのごとに行われる奇妙な散歩とその伯父の死から始まる。一九七二年、イサム伯父さんの死を知らされたナオミはイサムの妻、アヤ伯母さんがいるグラントンへ帰郷し、ナオミの兄、ステイブン、母方のエミリー叔母さん、そして世話人のナカヤマ牧師とも久方ぶりの再会を果たす。作品は伯父の死を軸とする現代の物語に、ナオミの強制移住時代前後の物語や家族の回想、そして戦時中の日系人強制収容の過程を記録したエミリー叔母さんの日記を中心とする過去の物語が挿入され、時折ナオミがみた詩的で象徴的な

夢の話も織り交ぜられながら展開していく。その過程は伊藤章が指摘するように『オバサン』がナオミの個人の記憶と歴史を融合させながら、日系カナダ人の強制収容・移住の歴史を描く「歴史メタフィクション」の物語でもあるし^②、政治運動家のエミリー叔母さんの影響によつて、ナオミが拒絶していた過去に半ば強制的に向きあい、「沈黙／発語」の二分化の問題^③を克服しながら、真実をみつつけていく「成長物語」^④であるとも言える。

では『オバサン』において、「原爆」はどのような位置づけとなるのか考えてみたい。主人公ナオミが物語の冒頭から抱える「日本へ行った母はなぜ戻つてこなかったのだろうか？」(三一)という問いの答えとして、物語のクライマックスに「原爆」の物語は唐突に現れる。母の不在の理由が明かされはじめるのが三九章から成る作品の第三六章から始まり、原爆の描写そのものは三七章に描かれるだけである。第三七章ではナカヤマ牧師によつて読まれるナオミの祖母からの手紙の中で、原爆投下の直後の長崎の様子が生々しく「カタストロフィー」(二八〇)という表現とともに描かれ、そこで祖母も母も被爆したこと、母が顔の一部を「欠損」(二八六)するほどの重傷を負い、それでも一九四九年までは生きていたということが明かされる。ここで、この原爆に関する一連の流れは祖母の手紙をナカヤマ牧師が読み上げ、その様子と内容がナオミの視点で語られることも留意すべき点であろう。ナカヤマ牧師が手紙を読む際に「日本語は不思議な響きをもつて、とても格式張つて聞こえた」(二七九)とあるように、ナオミ(とステイブン)に「原爆」について、幾重かの手順を踏んで、「伝達」される。ナオミが知りたかつた母のこと、そしてともに知らされ

る被爆の事実は、祖母によつて日本語で手紙の中で書かれ、手紙もナオミが自分で読むのではなく、ナカヤマ牧師が(おそらく)日本語で読み上げるものをナオミの視点で自身の言語にて物語化される、という間接的な伝達が行われている。

作品において「原爆」はある種の記号性を備えて描かれる。例えば、物語の最後に直接的に語られる「原爆」の手紙は、実は物語冒頭からエミリー叔母さんの日記とともにアヤ伯母さんからナオミに渡された小包の中に入っている。しかし、それは日本語で表記されており、祖母である「カトウのおばあちゃんの書いたその雨の文字は、どす黒く脂ぎり、どろどろして不気味だった」(二八一)と、言うまでもなく「黒い雨」のイメージを想起させながらも、上記のように日系三世のナオミには「読解不能」(五五)で、自分の手元にあるにも関わらず他者による翻訳・媒介なくしては読めないものである。また、イサム伯父さんとの一九五四年から始まったカナダ先住民の居住跡の草原での毎夏の散歩を回想する第一章、つまり物語のはじまりには「一九七二年八月九日」(二)とすでに記されている。この「八月九日」という日付は、その時点で事実を知らないナオミにとっては何も意味しないが、物語の最後で明かされる結末によつて「八月九日」という記号に、母が亡くなる原因となった長崎の原爆投下日であり、「散歩」が伯父のナオミの母に対する弔いの儀式であつたという意味が付与されることとなる。このように記号化された「手紙」と「日付」は、特に「日付」については、また読者に対する仕掛けでもあるだろう。言い換えると、アメリカで出版され、日系カナダ人の強制収容の歴史を語るだけでなく、北米における日系人強制収容に

対する戦時補償の一大推進力にもなった⁶⁵。と言われているこの作品が実は「八月九日」というまた「別の国」で起こった悲劇の日付で始まっていることに読者がどれだけ気づくのか、ということを試しているようにもみえるのだ。そして、作品を読み終えた時に、作品の最後のほんの数章にしか描かれていない不意の「原爆」の物語が「母の不在」の物語として作品全体に張り巡らされていることを主人公ナオミとともに認識せざるを得ない。

三二二つの手紙 — 「秩序／無秩序」

作品には二つの手紙が登場する。ひとつは前述のナオミの祖母が長崎での被爆を書いた手紙であり、もうひとつはエミリー叔母さんの日記である。エミリー叔母さんの日記はナオミの視点を通すことなく、政治運動家でもあるエミリーの言葉として書かれ、「親愛なる姉へ」というナオミの母への手紙の形式をとる。どちらも過去の出来事や記憶を「保存」し、また「伝達」しようとする手紙の役割を果たしているのだが、この二つの手紙は共通項がありながらも、対照的に作品の中で描かれている。一九四一年のクリスマスから始まるエミリー叔母さんの日記はナオミの母に子供たちや家族の様子を伝えつつも、中心となるのは真珠湾攻撃後の日系カナダ人に対する迫害や強制収容・移住命令の過程であり、政府の「不正 (injustice)」（四一）に対する「言葉の戦士」（三九）としての怒りの異議申し立てである。イサム伯父の言葉を借りれば「日本人らしくない」（四八）日系二世のエミリーは「カナダは私の国で、私の母国である」（四八）と叫び、またナオミによ

つて次のようにエミリーの人生は要約される。

どうやら彼女のこれまでの人生は、すべてカナダに住む日系二世たちの生活を守るために捧げられてきたらしい。黄禍とか、日系人は裏切り者であるとかいう考え方がかつて人びとの心に存在したこと、そしてそれは人種偏見からきたものであることを、彼女は世間一般に訴え続けてきたのだ。た。（四九）

言葉を発していくことを絶対的なものとみなし、自ら日系二世の「代表者」としてあらゆる公文書を用いながら、政府に対する対抗言説を持つて臆せず立ち向かうエミリーの姿は、公文書館で検索された歴史資料との出会いをきっかけとして生まれた⁶⁶。『オバサン』の原点・布石であると言えよう。手紙文で書かれた日記も「個人」というよりも日系人共同体の「集団」の記憶を記録・保管し、戦争におけるカナダ国内の歴史の流れを日系カナダ人の視点から理路整然と記述し、伝達しようとする。換言すれば、「秩序」を保つという国家の大義名分の下で決定された日系人に対する処遇をエミリーもまた「秩序」を持つて対抗しようとする姿が日記において明らかにされる。しかし、このエミリー叔母さんのアクティヴィストとしての姿勢にナオミは圧倒感を感じ、決して支持していないことが次のように述べられる。

自分が受けた迫害について多くを語る人々は私を不快に押しつけてしまう。彼らはあたかも自分の苦しみを武器やなんらかの

バツジのように掲げているように見える。自分の教師としての経験から言えば、不平不満を言う子よりも何も言わない子どもたちのほうが問題を抱えているのだ。(四一)

エミリー叔母さんの言葉や書類や電報や請願書―それらはすべて庭を耕そうとする必死の努力であり、労をいとわぬ活動の証拠であり、爪で土をひっかくことにも似た重労働だったのかもしれない。でも、そんなことが何の役に立つのか私にはわからない。(二二六)

ではエミリー叔母さんに対する「否定」の先には何があるのだろうか。その答えがエミリー叔母さんの日記(手紙)と対照的に描かれる祖母の手紙を軸に読み解くことで見えてくる。つまり「原爆」がやはりひとつの糸口になると言い換えられるだろう。

祖母の手紙は祖母自身とナオミの母の被爆のくだりに入ると「手紙はだんだんと無秩序(chaos)になっていく。事の詳細は時系列などおかまいたしに、書き散らかされていた」(二八二)と表される。祖母からの手紙はエミリーと同じく作品において、戦争の悲劇や暴力を語るのだが、この手紙はエミリーの日記とは逆に「無秩序」という表現を持って、説明のつかない感情や受けた被害の言語化の困難さ⁶⁾を表していると言える。ナオミもその手紙を聞くまでは「この人間に起こりうるカタストロフィーについてまだ理解していなかった」(二八〇)と述べるように自省の念と怒りがここで初めて生じる。先にも述べたように、原爆に対する直接的な言及はないものの、この手紙と同類の「無秩序」さは、た

びたび作品に横断的に挿入されるナオミの夢の物語と対比することができ、また被爆した母親とも深く相關する構図が浮かび上がってくる。その夢には常に「赤」、「血液」、「肉」、「切断される脚」、「皮膚」、「花(バラ)」、「拷問」などと身体性・有機性を象徴するようなイメージが現れ、最終的には次のような夢へと集約されていく。

長崎の若いおかあさん。私もそこにいませんか？私の夢の中で、真つ暗なスローカンの夜空に炎があかあかと燃え上がる。悲鳴が聞こえ、山は裂ける。あなたの長い黒髪が抜け落ち、裂けた山の割れ目に降り注ぐ。私の脚は鋸で切断される。あなたの顔の皮膚は溶岩のように煮えたぎり、骨から溶け落ちる。おかあさん：私はあなたの顔をみています。どうか顔をそむけないで。(二九〇)

第三七章の原爆についての挿話後、第三八章における現実か夢か境界線が曖昧なナオミの語りの中で、ナオミは被爆した母親と自分を同一化しながら、また被爆地である長崎とナオミの強制移住先であるスローカンも同一化した夢を見る。この夢でナオミは自らを母親と同じ被爆者の立場に置こうと試みていることは明らかであろう。そして、それはまた今までナオミが置かれていた「自己/他者」「加害/被害」「日系(日本)/カナダ」など二項対立の枠組みをすらそうとする作家コガワの試みとも読み取ることができる。エミリーの日記とナオミの強制移住時代の回想だけでは、この作品は単に日系カナダ人の国家に対する「差別/被差別」に

対する異議申し立ての物語で終わったのかもしれないが、国家を超えて「戦争」の暴力を語ろうとすることで、「人類的」視点を付与していると言えるだろう。「カナダ国民」であるにも関わらず、日系カナダ人が戦時中に不当な扱いを受けたことを主張し、「カナダ国民」として帰属を求めるエミリー叔母さんの言葉によって語られる論理は「正論」であり、結果として作品が出版されたのちに現実に政府からの「政治補償」として認められたことである。しかし、「日系人強制収容」というテーマと「原爆」というテーマが互いに呼応することで、枠を取り払い、固定化を避けようとする姿はナオミのエミリー叔母さんに対する違和感にも合致し、言語化に困難を伴う受難の歴史のひとつの語りの可能性を提示しているのではないだろうか。断片的に語られる夢の中でナオミは「沈黙の中にこそ語る手段がある」（二七四）と考える一方で、母親に呼びかける形で「私たちは沈黙の中で迷ってしまい、沈黙が私たちお互いを破壊させてしまった」（二九二）と「発話」も「沈黙」もどちらも語る手段として結論づけていない。そして不在の母に対して、「お母さん、私は聞いています。どうかあなたの声を聞かせてください」（二八八）と呼びかけて「聞こう」とする「受容」に作家コガワ自身がひとつの「語り」の可能性と答えを見出しているのではないだろうか。

注

1 本稿は第三九回原爆研究会（二〇一二年七月八日、於広島大学）ワークショップ・「北米文学における核表象について」での発表をもとに改題・論考したものである。

Joy Kogawa, *Obasan* (New York: Anchor Books, 一九八一年)。全ての引用はこの版からとし、文中括弧内に頁数を記す。また、訳についてはジョイ・コガワ『失われた祖国』（長岡沙里訳、中公文庫、一九九八年）を参考にした。

2 伊藤章「記憶を歴史にするために ジョイ・コガワ『おばさん』論」（『アメリカ文学ミレニアム2』、南雲堂、二〇〇一年）。

3 「沈黙／発話」については、作品全般に渡って散りばめられているテーマであり、作品批評の多くも「沈黙／発話」の二分化について注目している。(Helena Grice "Asian American fiction": Beginning Ethnic American Literatures Manchester: Manchester UP, 二〇〇一年)

4 中村理香『政治言説』としての小説テクスト「ジョイ・コガワ、Obasan におけるアクティヴィズム・文学・国家」(『アメリカ力研究』第三八号、アメリカ学会、二〇〇四年)。

5 河原崎やす子「Joy Kogawa」(『日系アメリカ文学 三世代の軌跡を読む』創元社、一九九七年)

6 野崎京子「公文書との出会いと記憶の再生—ストーリーを生み出す歴史文書」二三九頁(『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇一一年)。

7 中村理香は『オバサン』における原爆表象について次のように指摘している。「ジョイ・コガワは『オバサン』において、主人公の日系カナダ人の娘ナオミが「被爆」という他者にたいして行使された暴力を自身の言語に翻訳し伝達するさまを描く。そしてそれが被爆という暴虐を世に伝えるための必要不可欠な行為であると同時に、ナオミによる間接的語りが元々の体験に刻まれた言語化不能の直接的暴力や、原爆という物理的暴力の反映としての言語の破壊を消し

去ってしまうという矛盾を示す。それは言語を介して被爆という非道を理解し伝達することの必要性にもかかわらず、非体験者であるナオミによる翻訳行為が他者の痛みを完全には表象しえないことを示すものであり、コガワにおける「翻訳」はその言語的暴力への自

己参照的批判であるように見える。「アジア系アメリカ文学および研究にみる他世界との交渉―『アジア系ポストコロニアル批評の可能性』三三三―三三三頁（『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇一一年）。